

M E S S A G E

消えた土木遺産

—江戸市民の命の水のダム—



虎ノ門のダム

数年前、時間つぶして広重の画集をばらばらとめくっていた。そのとき一枚の絵で手が止まった。「虎ノ門外あふい坂」であった。

手が止まったのはこの絵の背景の滝に気がついたからだ。この滝は自然の滝ではなく人工の滝であった。

そう、この絵には堰堤つまりダムが描かれていた。これは石を積み、練り固めた巨石ダムだ。絵の構図からいくと高さ4m以上の立派なダムが江戸のど真ん中にあったのだ。

絵の場所は虎ノ門である。裸の二人の職人が金毘羅さんに願掛けに行くところであろう。その金毘羅さんは今も虎ノ門交差点近くのビルの谷間にある。猫のような狐のような動物が座っているのはアメリカ大使館への坂で、反対側の丘の上の光を灯している屋敷は今の首相官邸である。

まさに、溜池交差点から赤坂の繁華街はついこの前までダム湖の「溜池」であった。

江戸市民の命の水

1590年、徳川家康は豊臣秀吉の命令で江戸へ移封された。その当時の江戸は住家がぼつんぼつんと点在する寂しい寒村であった。江戸城のある台地の所々に湧水はあった。しかし、大軍を擁する徳川勢の飲料水としてこの湧水では絶対的に不足していた。

江戸城から見渡す低平地には利根川や隅田川が江戸湾へ向かって流れ込んでいた。しかし、それらの川の水は飲み水としては使い物にならなかった。なぜなら、関東は限りなく平坦であり、江戸湾の海水は河口から奥深くまで逆流して入り込んでいた。そのため、川の水や地下水は塩分が高く飲料水としては使用できなかったのだ。

徳川家康が長期政権を樹立する地として、江戸の水不足は決定的な障害となった。江戸の都市づくりで最初にやるべきこと、それは清浄な飲料水を確保することであった。

当時、虎ノ門付近の地形は狭窄部となっていた。この狭窄部に堰堤を建設すれば貯水池が誕生する。この

地形に目をつけた家康は慶長11年(1606年)、和歌山藩の浅野家に堰堤の建設を命じた。

この虎ノ門堰堤は日本最初の都市市民のためのダムとなった。そのダムの姿が広重の「虎ノ門外あふい坂」に見事に描かれていた。

虎ノ門ダムが建設されてから50年後、総延長43kmの玉川上水が完成した。玉川上水はこの虎ノ門ダムの溜池に連絡された。多摩川の水が豊富なときにこの溜池に水を貯めて、多摩川が渇水になったときこの溜池の水を使う。

現代と全く変らない近代的な水資源制御システムが構築されたのだ。

江戸時代を通じこの虎ノ門ダムは江戸市民100万人の命の水を供給し続けた。

消えたダム

明治31年、新宿に淀橋浄水場が完成した。多摩川の水は虎ノ門ダムの溜池を通り過ぎて、淀橋浄水場へ直接送り込まれ沈殿・ろ過されることとなった。

竹村公太郎

TAKEMURA Koutarou

■経歴:

財団法人リバーフロント整備センター理事長、立命館大学客員教授

1945年生まれ。東北大学工学部修士修了後、建設省に入省。河川局開発課長、近畿地方建設局長を経て国土交通省河川局長。02年に退官後、04年より現職。著書に「日本文明の謎を解く」(清流出版)、「土地の文明」(PHP研究所)など。



「正保年中江戸絵図(しょうほうねんちゅうえどえず)」
独立行政法人国立公文書館所蔵

虎ノ門ダムの溜池は都市化の邪魔者になった。溜池は少しずつ埋め立てられ、いつの間にか江戸と東京の人々の命を支えた虎ノ門ダムは消えた。それは東京都民の心から命の水の源の記憶が消えていった瞬間でもあった。

東京はとめどなく膨張した。多摩川で小河池ダムが建設され、それでも足りずに利根川上流域を水没させ東京都民のためのダムが建設された。

東京都民は自分たちの命の水源地を都心から山奥へ追いやった。もう、東京都民は自分たちの命の水が何処から来ているか知らない。もう、東京都民は命の水源地を見ることはない。

土木遺産は土木技術者のノスタルジーのために存在するのではない。

土木遺産が日本文明を支えてきたこと、そのことを多くの人々が学ぶためにある。

土木遺産で歴史を学ぶことは、未来の文明に向けて必要なインフラは何かを考える場でもある。